

デュルケム派社会（形態）学と人文地理学

野澤，秀樹

<https://doi.org/10.15017/2231033>

出版情報：史淵. 117, pp.189-219, 1980-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



デュルケム派社会(形態)学と人文地理学

野澤秀樹

緒論

(1) 地理学は一九五〇年代後半、とりわけ六〇年代以降大きな変革の渦の中にあつたことは何人も認めるところであらう。第一に科学方法論や技術・手段としての数学の導入によって、著しく科学としての地理学の前進をみたと、第二に心理学、社会学などの隣接諸科学への接近がみられ、地理学の視野が著しく拡大したことなどがその特徴としてあげられる。前者が地理学における「計量革命」と呼ばれる方法論的・技術的変革の面を代表しているのに対して、後者は「計量革命」以後の地理学の対象、目的への再検討の中で求められてきているように思われる。

近年著しく盛んになってきた空間知覚の問題は心理学への接近を示すものであり、また社会過程と空間形態の対応関係に関して、社会学と地理学の橋渡しに努力するハーヴェイ (HARVEY 1972) や、「計量革命」以後の総体的地理学の樹立をめざすP・クラヴァル (CLAVAL, 1973) がその理論的根拠の一つとして社会学理論の導入を説くのは、後者の今日的状況の一端を顯示するものである。しかしこのような心理学や社会学への接近は単にそれらの科学の既成の問題関心や理論の導入で済されることではない。当然地理学としての対象、目的、立場が問われるはずである。

現在と全く状況は異なるが、一九世紀末から二〇世紀始めにかけて、いずれも近代科学としての基礎を築きつゝあ

ったE・デュルケムの率いる社会学の一派とP・ヴィダル・ド・ラブラーシュ（以下ヴィダルと略記）の人文地理学との間にそれぞれ学的根拠をめぐって際立った対立的状況を呈していた。この対立は「論争」としてとらえられているが、この「論争」を再検討してみることは上に述べたような今日の状況において無意味ではないと考えられる。まず緒論においてはこの「論争」と呼ばれるものがどのようなものであったのか、次いでこの「論争」に関する研究史を辿り再検討の現代的意義を確認しつつ、本論において、デュルケム学派の人文地理学批判はどのようなものであったのか、次いでデュルケム学派社会学の主張する社会形態学とはいかなるものであったのか、そしてその論争の本質的問題である両者の対立点となった原理と方法について検討し、今日の地理学のあり方の参考にしたと思う。

(2) 前世紀の末から今世紀の始めにかけて、デュルケムの下に集まった社会（形態）学派と人文地理学の間には論争、対立があったといわれる。しかし実際に調べてみると一方が批判し、他方がそれに答えて反論するといった互に論文を闘わすといういわゆる論争のかたちはとられていない。俗に「論争」・対立といわれるのは、デュルケムが創刊し、指導した『社会学年報』*L'Année Sociologique* 誌上にデュルケムを始め、彼の優れた門弟であるM・モース、M・アルプワックス、F・シミアン等によって、当時著わされた人文地理学の業績が詳しく、紹介・批判が行なわれたことに端を発する。これに対し人文地理学の側ではC・ヴァローがそれについて若干ふれているだけであり、ヴィダルも地理学と社会学との関係についての論文を書いているが、対立的、論争的なところは全くない（VIDAL DE LA BLACHE, 1904）。従って論争、対立とはいわれながら、その実きわめて一方的な論争であったといえよう。

ところでデュルケム学派、とくにデュルケムが批判の対象とした人文地理学はドイツの地理学者F・ラッツェルであったが、ヴィダルに率いられたフランス地理学派に関しても——両者に対する批判には若干のニュアンスの違いは認められるのだが——、後述のようにほぼ同じような理解の上に立って、批判を行なっている。以上のように社会学派と地理学派の間には直接的な対話による論争はなかったとしても、いずれも同時期に自己の立場を確立せんとし

て、主張し始めた両学問の間に客観的にみて、その内容に関して後述するところの対立・論争といえるものがあつたことは事実である。

(3) この論争については歴史家のL・フェーブルが社会形態学からの攻撃に対して人文地理学擁護の論陣を張つたことはよく知られている(FEBVRE, 1922)。その中で彼は「社会形態学は自分のために人文地理学の廃止を主張することはできない。なぜならこの両者は同一の方法を有してもいないし、同一の傾向のものでもないし、目的を同じくするものでないからである」(同、訳一三三頁)と判定を下して以後、フランスではM・ソールが再びこの問題にふれるまで、お互に相手を無視する結果になつた(SORRE, 1957)。

他方社会学の側からこの論争にふれたものは、デュルケム学派の系譜を引くA・キュヴィリエのものであろう(CUVILLIER, 1936)。その中で社会学における指導仮説として、自然的「基体」―社会地理学と地政学及び人間的「基体」―デュルケム派「社会形態学」と人口論をやゝ詳しく論じているのがそれである。

わが国地理学界では、水津一朗が社会集団の地理的基盤を研究するにあつて、この論争にふれ、フェーブルの判定を援用している(水津、一九六四、一頁)。この論争についてのすぐれた本格的な研究は小寺廉吉のそれであるが、なお未完であり続編が待たれる(小寺、一九六九)。

なおわが国の社会学界でこの論争についてふれたものは管見の限り、きわめて少なく、赤神良讓が、ラッツェル地理学と社会形態学との関連にふれているにすぎない(赤神、一九四八)。今日社会学界ではデュルケム・ルネサンスといわれるほど、デュルケム研究が数多く著わされているが、社会形態学、とくにこの論争についての研究はないようである。社会形態学は後述のように初期のデュルケム社会学方法論において大きな位置を留めていたものだけに不思議に思われる。

ところで近年地理学においては「計量革命」以後の動向として、ヒューマニスティックな立場が主張されるように

なり（山野、一九七九、竹内、一九七九、再びヴィダルの地理学やこのヴィダルーデュルケム論争が検討されるに至つて）（BUTTIMER, 1971, 1978; BERDOULAY, 1978）。このようにこの論争の再検討はなお現代的意義を失っていないように思われる。

一 デュルケム学派の人文地理学批判とフェーブルの人文地理学擁護

(1) デュルケム学派の人文地理学批判

a デュルケムのラッツェル地理学批判 上述の意味での論争の発端となり、デュルケム学派が社会形態学を強く主張する直接の契機ともなったデュルケムのラッツェル地理学批判の要点を取り上げておきたい。

デュルケムは創刊間もない『社会学年報』に数年にわたつてラッツェルの著書、論文の紹介、批判を行なっているが（DURKHEIM, 1898, 1899b, c, 1900a, 1901）、その中で最も重要な意義を有するものは、第二巻と第三巻のものである。第二巻において初めて、社会形態学 *morphologie sociale* 部門が設けられ、デュルケム自ら、そこに社会形態学についての短文を寄せ、引続いてラッツェルの主著である『政治地理学』を、そして第三巻に同じく『人類地理学』第二版の詳しい内容紹介と批判を行っているからである。

デュルケムはラッツェルの『人類地理学』の書評において、「ラッツェル氏の寄与は大きい、衰退しつつある地理学を孤立から救い、社会学に近づけ真の社会科学とし、豊かな研究への道を拓いた」とその業績を高く評価しつつ、しかし「ラッツェル氏が企てている科学は示唆的ではあるが、目的、方法はなお曖昧なところがある」としてラッツェルを批判する（DURKHEIM, 1900a, p. 556）。デュルケムによれば、ラッツェルが彼の『人類地理学』の中で扱おうとしていることは、「土地が社会生活全般の上に及ぼしうるあらゆる影響を研究すること」だとし、「この観点から提起される問題は唯一の、同一の科学に属するにはあまりにも異質なものを含んでいる」という（Ibid, p. 556）。土

地や気候の性質の、集合表象や神話、伝説、芸術などへの影響は社会学の、また上と同じ原因の、国民の性格への作用は集合人種学の、さらに土地の形状の、人口の集中・分散に対する影響は人口学の、それぞれ個別の科学の扱う問題である。ラッツェルが扱おうとしている問題はあまりに多様であって、一人の学者の能力に余るといのである。

しかしデュルケムの批判において、このこと以上に重要な指摘は上のような多様な性質をもつ事実を検討するに当たって、地理的要因 *facteur géographique* がどんな役割を果しているかという唯一の研究目標において研究を行なうとき、これらの現象の発生において等しく作用している他の要因を見失ってしまい、地理的要因の役割りだけを誇張してしまふという点である。デュルケムによれば「人間を説明してくれるのは土地ではなく、土地を説明してくれるのは人間である。そして地理的要因が社会学にとって認識すべき重要なものとして留まるとしても、土地が新たな光をもつて社会学を照らしてくれるのではなく、土地は社会学によってしか理解することができない」(Ibid, p. 558)。

同じように『政治地理学』の書評においても、ラッツェルが社会の領土的形態 *formes territoriales des sociétés* を取扱っていることからデュルケムの構想する社会形態学に近いことを評価しつつ、ラッツェルの概念の曖昧さを批判する。ラッツェルの場合政治地理学の対象として、地上に固着した社会がとる形態(いわゆる社会形態学)と土地の形態(土地の物質的配列 *dispositions matérielles du sol*) が与える影響とが明確に区別されていない。後述のようにデュルケムにとってはそれぞれの形態を社会に与えるのは、社会的原因であり、後者の土地形態が問題なのではない。「自然地理学的事実が国家や社会の形態に何らかの役割を果すことはあるが、それは研究されている諸現象を産み出す諸原因の一つにすぎない。もし自然地理学的事実が国の発達に影響する仕方だけをもつばその研究目的とするなら、それだけが唯一の原因とみなされる」恐れがある。そして「地理学という言葉は自然地理学的事実が本来もつていない重要性をほとんど宿命的に与えてしまふ」と(DURKHEIM, 1899a, p. 521)。

究局的にデュルケムのラッツェル批判は以上のように要約され、この批判点はデュルケムに限らず、デュルケム学

派に共通した批判点として継承されていく。

b デュルケム学派の人文地理学批判　たとえばデュルケムの高弟モースは人文地理学と社会形態学との相違点を記した個所で次のように述べている。「地理学は地的要因 *facteur tellurique* にはほとんど排他的優位性を与えてきた。彼らは社会の物質的基体をそのあらゆる要素において、またあらゆる局面の下に研究するかわりに、まずもって彼等の注意を集中したのは、何よりもまず土地 *soil* の上にであり、彼等の研究の第一面に置くのがそれである」(MAUSS, 1906, p. 42)。土地はそれだけで作用するのではなく、多くの不可分な要因に混り合って作用するものにはすぎない。要するに地的要因はその全体性と複合性における社会環境と関連づけられなければならないというのである。全く異存のない主張である。同じくデュルケミアンの一人シミアンはヴィダルの指導の下で行なわれたフランス地理学派の誇る一連の地域的モノグラフィーを取上げ人文地理学批判を展開している (SMIAND, 1908)。

シミアンは彼がとり上げた地理学者 (D・ドゥマンジョン、R・ブランシャール、C・ヴァロー、A・ヴァシェール、J・シオン) の間で、地理的事実 *faits géographiques* の観念、また地理学的研究の対象の観念が多様であるのに戸惑いを感じながら、その中から最大公約数的に認められる共通項を、あらゆるものの地表面における立地 *localisation* に探り当てている。シミアンにとっては、それはフランス地理学派のヴァシェールが行なっているように自然環境との関係においてのみ地理的事実たりうると考え、その研究を行なうことによって地理学は説明の科学となりえ、かつ他の科学が取り扱わない地理学固有の対象となりうるといふ。従ってドゥマンジョンやヴァロー、さらにシオン等のような自然環境より人的要素にその説明を重視する研究——とくにドゥマンジョンが人間が自然に作用することを彼の研究の枠組に入れていることは、固有の説明的科學としての地理学を失敗に至らしめると主張する (Ibid, p. 78)。従ってドゥマンジョンが自然的諸条件を注意深く詳細に研究した後、地理的現象がそれらの諸条件と関係をもたないことを明らかにしたとき、シミアンは地理学テーゼに反する研究を行なっていると批判する (Ibid, p.

729)。この「地理学的テーゼ」とはいったい何か。これこそまさにフェーブルがいうように社会学者が人文地理学を一つの「理想的な人文地理学の型」に嵌め込もうとした地理学者の与り知らぬテーゼということになる(FEBVRE, 1922, 訳、一三五—一四〇頁)。

このシミアンに限らず、デュルケムでさえ、彼等社会学派がかくあるべきものと考えるところの人文地理学—それは土地を第一にとり上げ、その地理的要因を唯一の原因とするに至る恐れのある地理学に対して批判を加える。そうした批判の中から後章でとり上げるような、地理学に取って替るものとして社会形態学を主張していくのである。

(2) フェーブルの人文地理学擁護

このデュルケム学派の批判に対して、フェーブルが人文地理学擁護の論陣を張ったことは上でふれたところである。フェーブルはこの論争を社会形態学から地理学の野心に対する不満・抗議であるとし、それを次の二点にまとめている(FEBVRE, 1922, 訳、八三—一〇二頁)。第一点は地理学者の、どんな人類集団、どんな人類社会であろうと領土的(地縁的)基礎のないものはないという主張に対する抗議であり、第二点は地理学が地理的条件によって社会類型を説明しようということに対する批判である。この二点は上述の社会学派の批判に集約されるものと考えられるが、フェーブルはこの二つの抗議に対して次のような人文地理学擁護ないし弁護の論を張っている。

前者については、社会学者が未開社会に関する人類学者や民族学者の調査から、たとえばトーテムイズムが地理的根底を有していない社会形体であることの多数の事例をあげ、「未開人もっばら地縁的なものに限られた集団形成の様式しか知らぬものではない」(同、八五頁)と地理学者の土地拘束性に反論する。要するに地理的根底を欠く集団は社会学の研究対象ではあっても、地理学に対しては手懸りを提供しないということである。こうしたデュルケムの主張に対してフェーブルは地理的根底、すなわち物質的基体をもたないとはすなわち形態をもたないことになり、

「そもそも研究すべき『形態』のないところに、形態学の出る幕がない。地理学はこれに反して、集団が集団としての意味では、自分の分野から逸脱する場合にも可能である。それが逸脱しても、人間どもがその上に生活する土地は彼らの手に残っている―それからして気候があり、もろもろの生産物があり、彼等が頻繁に往来する場所、彼等が別種の集団―の構成要素たる限りにおいて、占居しているところの場に固有な生活条件のすべてが彼らの手に残っているわけである」（同、九二―九三頁）。フェーブルはこのような明快な論旨をもって人文地理学を擁護した。

後者第二点については、前節のデュルケム学派による人文地理学批判から明らかであろう。フェーブルはデュルケムのラッツェル批判を引用する。「もちろん土地の影響は無視して差しかえないどころではない。しかしそれが人々の主張するような卓越した力を有するものとは思えない。：われわれの知るところでは、諸々の社会類型を構成している諸特徴のあいだにはこれ〔地理的条件〕によって説明され得べきものは一つもない。その上地理的条件なるものが場所ごとに相異し、同一な社会類型が地球上の最も異った諸点において見受けられる以上、どうしてそれ〔ラッツェルがいうような地理的条件によって社会類型をとらえること〕が可能であろうかと」（同、九六頁）。上とは逆にここではデュルケムの批判は明快である。しかしこの批判についてフェーブルはラッツェルには妥当するがヴァイダリアンには当たらないとして、ヴァイダル学派をもち出すことで、デュルケム学派の非難を排除する。しかしフェーブルはデュルケム学派による人文地理学批判はラッツェルに責任を帰することで問題が解決するとは考えていない。この論争・対立の本質が両学問の原理と方法に関する争いであつたことを見抜いている。そして彼はデュルケム派の非難に照らしながら、ヴァイダル学派の人文地理学の原理・方法の正当性を主張、展開する。しかしわれわれはこの本質的問題に入る前に検討しておくべきことがある。フェーブルは簡単にデュルケム派のラッツェル批判を受け入れているが、そのように簡単にはいえないのではないか。またデュルケム学派のラッツェル地理学批判もそのまゝでは鵜呑みにできないところがある。つまりラッツェル―デュルケム関係、ラッツェル地理学とデュルケム社会形態学との間に事実をはっきり

させておかなければならないことがあると考へる。このことを明らかにすることによって、上述してきたデュルケム派のあの執拗なまでの批判、さらにデュルケム派の社会形態学とヴァイダル派の地理学の原理と方法の關係（対立も一層明らかになつてくるものと思はれる。このラッツェル—デュルケム關係の追究がフェーブルでは見落されてゐる。

二 ラッツェル地理学とデュルケム派社会形態学

(1) ラッツェル地理学

上のデュルケムのラッツェル批判から、デュルケムが一般に理解されてゐるようにラッツェルを自然的条件のみを決定要因とする環境決定論者とみなすような皮相な理解を示してゐると速断してはならない。デュルケムの社会学研究にとつてラッツェルの地理学が彼の初期の関心事であつた社会的基体の研究においていかに大きな影響を与えてゐるかは、ラッツェルの地理学とデュルケム社会形態学の構想を比較してみれば明白である。そこでわれわれはここで簡単にラッツェル地理学にふれざるをえないのである。筆者はラッツェル地理学には全く不案内なのであるが、最近の優れたラッツェル研究（山野、一九七二、水津、一九七四、野間、一九七五）に導かれながら、あえてデュルケム社会形態学との關係をみる上で参考となる点を要約しておきたいと思ふ。

ラッツェルの最大の功績はC・リッターによつて地理学の課題とされた「自然（大地）と人類（民族・歴史）の係わり」、すなわち、「歴史と舞台との關係」を地理学の正統な基本的課題として継承し、それまで地理学において失われていた人的要素を再び取り入れ、地理学を再興したことにあるといはれる。そしてラッツェルの人類地理学は三種類の問題を課題としてゐる。(1)人間が大地上に分布・集合してゐる仕方を確認すること、(2)これらの分布は歴史の中で継起したあらゆる種類の運動の結果である。これらの運動の法則、運動の要因を探究すること、(3)自然環境が個人にまた個体の媒介によつて社会の總体に影響する結果を研究すること、の三点である。デュルケムもいふようにこの

最後の種類の課題は明らかに他の二種類の課題と非常に異なっている。その上彼の著書において限られた場所をしめているに過ぎないところ（DURKHEIM, 1900a, p. 551）。この部分がまさにデュルケムのラッツェル批判が妥当なところである（FEBVRE, 1922, 訳、一〇七頁）。

従って人類に対する自然（土地）の影響を問題とするラッツェル人類地理学の課題は、上の第三の課題においてみられるべきではなく、「民族集団の『運動』を土地との関連において追究することがラッツェル地理学の中心課題であった」とされる（山野、一九七二、二四五頁）。この運動の概念がラッツェル地理学において重要な概念であることはデュルケムも認めている。人間の運動（種族・民族の移動）を土地に従属したものとして考察する。この土地に従属するとは、土地の種々な要素ないしは属性——大きさ、位置、形状さらに土地のもつ自然諸条件（地形、水量、植物被覆など）に従属することであって、土地のもつ属性の違いによって「運動」の内容に影響を与えるというものである。すなわちラッツェルにおいてはこの土地の概念の内容がきわめて豊かなことである。つまりラッツェルの「土地とは生物（人間をも含めて）が占拠し、その上で活動を営む舞台である。実際の土地は植生や土壌など種々の具体的な自然条件を含むものである。しかしラッツェルは一応それらを、大きさと形をもつ『空間』として、また大きさと形を含み、また自然的属性をもった『位置』として一般抽象化した形で考えようとした。…こうして「運動」するものと土地との関連の考察は、つまるところ『運動』するものの『位置』や『空間』の考察となる」（山野、一九七二、二四九頁）。

「運動」、「位置」、「空間」がラッツェル地理学の中心概念である。それぞれにおいて豊かな内容を含みながら抽象化された概念である。「位置」と「空間」は「運動」に対して地表上の自然条件が及ぼす影響を究明するのに必然とされる概念である（水津、一九七四、九二頁）。「位置」のそれは単なる地点を意味するのではなく、一定の大きさと形をもったものであり、またその占めている地表の属性をもつものである。それが各地域や民族に特性を与える。

さらに「位置」の概念には関係位置として作用するところの相互作用を含んでいる。この相互作用から生じるものとして隣接位置と関係的位置があるが、後者の関係的位置には中心的位置、周辺的位置などがあり、それぞれの位置によって人類・民族（集団・社会）への係わりは異なってくる。「中心と周辺はいわばラッツェルの体系を支える基本概念を互に結びつける役目を果している」といわれる（野間、一九七五、七三頁）。

このように「自然と人間との諸関係の考察は、運動と位置の概念を媒介することによって、きわめてユニークなものとなる。：歴史的な運動によって、領域間の隣接位置の関係は変化し、ひいてはその領域の自然が人間に対してもつ関係（自然的位置）も変化するはずのものであるから、かれの環境論は、自然と人間との直接的な関係だけを求める学ではなかったわけである」（水津、一九七四、九二頁）。今日従来のラッツェルの環境論に対する一面的な評価から以上のような「運動」、「位置」概念を正しくとらえることによって再評価が行なわれ、それはラッツェルの環境論から領域論（空間論）への評価の移行としてとらえることができるものである。その内容については上掲の諸論文によられたいが、当面のわれわれの研究には上述の検討で充分である。ラッツェルが自然（土地）と人間（社会）を直接に対立せしめていたのではなく、そこに「運動」、「位置」、「空間」概念を媒介していたことは、実はデュルケム自身もっともよく理解していたところであった。しかるにデュルケムは上述のような単純なラッツェル批判に終始したのか。デュルケム派社会形態学を検討するときそれが明らかになってくるように思われる。

(2) デュルケム派社会形態学

a 社会的事実と社会学の分類 デュルケム社会学についてはわれわれは周知の方法論の書をもっている（DURKHEIM, 1895）。それによりながら必要な点を要約しておく。デュルケム社会学の根底は周知のように社会的対象を社会的事実 *faits sociaux* として、それが事物として取扱わなければならないという点にある。そしてこの社会的事

実とは (1) 個人意識による社会的事実の外在性と、(2) 社会的事実が個人意識に対して働く強制作用によって、その存在を確認することができるものである。この社会的事実とは二つの面から定義される。一つは行為様式 *manière de vivre* による定義、いわば生理学的部類による定義である。それによれば、(1) 社会的事実とは諸個人の上に及ぼすところの外部的強制力によって認知され、また (2) 社会的事実を、それが集団の内部において示す拡散によって定義づけることができる。たとえば法律、道徳、信念、慣習などの社会的事実が拘束として、社会の反作用によって外部に表われ出るとき、たやすく確認されるのである。

他方社会的事実とは生理学的部類に属するものの他、存在様式 *manière d'être* すなわち解剖学あるいは形態学的部類の社会的事実がある。ここで問題になるのは集合生活の基体 *substrat* に関するものである。たとえば「社会を構成する要素的部分の数及び性質、これらの部分の配列の様式、これらの部分が到達する結合の程度、地上における人口の分布、交通路の数及び性質、住居の様式」である（訳、三九頁）。これらは上の行為様式、あるいは感覚、あるいは思考の方式に帰着されない存在様式にかゝるもので、これも上の行為様式と同様個人を強制するものである。後者のように存在様式によって定義される社会的事実とは、形態学的部類のものであり、この諸特徴によって、諸社会の類型を設定し分類することができる。これを任務とする社会の部門に社会形態学という名称を与えている（同、一九頁）。このようにしてデュルケムは社会学的説明における社会形態学的事実の根源的重要性を主張する。そのうち最も重要性をもつのは人的要素を主要因とする内的社会環境 *milieu social interne* であり、その内的環境を構成する二特徴、すなわち社会の容積 *volume* と密度 *densité* である（同、一五七—一五八頁）。前者は社会的単位としての諸個人の数であり、後者はその集中・分散の度合である。これらの形態学的事実が諸社会の類型を特徴づける。

b 社会形態学 『社会学的方法の規準』で与えられている社会形態学の定義はきわめて抽象的なかたちで述べられているが、上述のラッツェルの『政治地理学』の前に掲げられた短文は社会形態学の定義づけが一層明快になっ

ている。

「社会生活はその形態 forme と大きな grandeur に規定された基体の上に根拠を置いている。その基体を構成しているのは社会を構成する個人の全体であり、彼らが土地の上に配される様式であり、集合的關係に影響を与えるあらゆる種類の事物の性質や形状である。人口の多寡、密度、都市に集中しているか、農村に分散しているか、さらに都市や住居の構成様式、社会の広袤、境界および交通手段の発達程度に従って社会の基体は異なる。ところで他方この基体の構成は直接にか間接にあらゆる社会諸現象に影響を与える。それはあらゆる心的現象が直接か間接に、脳の状態と関係するのと同じである。これこそまさに社会学が係わりをもつところの、また全く唯一、同一の対象にかゝわるが故に同一の科学に帰属すべきところの一群の問題である。この科学こそ我々が社会形態学と呼んでいる科学なのである」(DURKHEIM, 1899a, p. 520)。

実はラッツェルも政治地理学の名の下にこれと類似した一つの科学としての総合を試みていた。これが上の論争を生んできた底流にあるものである。デュルケムによればその地理学派の試みは混同を導くだけである。というのは地理学派が問題とくるのは土地の形態であり、土地の上に確立した社会がとる形態が問題とはされていないからである。両者は全く異なるものだからである。実際、それぞれの形態を社会に与えるものは、国境の防御状態、交通網の密度、都市の規模の大小、国土の領域の広袤といった社会的原因である (Ibid., p. 533)。ラッツェルの『政治地理学』では上の両面が曖昧に取り扱われ、結局前者土地の形態と土地の物質的配列が人々の政治的展開の上に与える結果を決定することに主眼を置いたこと、それに対して前章にみたようなデュルケムの批判に至るわけである。

いずれにしてもデュルケムはラッツェルの『政治地理学』を社会形態学の別名として現出すると述べているように (Ibid., p. 531)、ラッツェルの政治地理学が社会的地的形態を取り扱うかぎりにおいて、デュルケムの社会形態学の構想と同じくするものであるといえる。次のデュルケムの文章はラッツェルの影響が強く表われている。

「社会的基体は何よりもその外的形態において決定されなければならない。この外的形態は主として、(1)領域の大きさにより、(2)社会が占める状況、すなわち大陸に対するその周縁的位置、または中心的位置と、その社会が隣接する社会に包まれている仕方などによって、(3)その国境の形によって決定される。事実ラツツェルが明らかにしたように、国境は国によりその性質と局面を交えるのである。……」

この外に内容がある。すなわち第一に人口の総量、その総数と密度からみた人口がある。また社会の中に含まれる二次集団がある。それはいろいろの大きさの村落、都市、地域、州のように物的基礎をもっている。このそれぞれについてはまた、集合体について研究すべき諸種の問題が提起される。居住地域の広さ、都市や村落の大きさ、水流の状況、外的限界、人口の量と密度などである。……」(DURKHEIM, 1900, 訳、二三二―二三三頁)。

そして社会形態学は単に形態を記述する観察の科学ではなく説明でなければならぬ。社会形態学は政治圏 *l'état politique*、国境の性質、人口密度がどのような条件と関係して異なっているのか、また都市がどのようにして生れ、その進化の法則は何か、その役割などについても問題にされなければならず、社会形態学はただ単に記述的分析をなすために、すでに形成された社会基体を考察するだけではすまない。それがどのように形成されるかその過程においても社会基体を観察しなければならないのである。従って社会形態学は静的な科学ではなく、状態が生じてきた運動をも当然研究として含むものである (DURKHEIM, 1899a, p. 521)。

長文の引用、紹介になってしまったが、デュルケムの社会形態学の性格は明らかに思ったと思う。

デュルケムは社会的事実の研究を二つの面から定義することができ、生物学にならって、二方面から研究されるべきことを説いたのであったが (DURKHEIM, 1888, 訳、一八六―一八七頁)、それを基に社会学の体系が図式的に示されたのは後の論文においてである (DURKHEIM, 1909)。それはすでに G・ジンメル の形式社会学の批判を通して明らかにされていたように、個別特殊科学を統轄する科学としての総合社会学の構想であった (DURKHEIM, 1900)。

c 社会形態学の成果 以上のようなデュルケムによる社会形態学の定義づけ、社会学体系におけるその位置づけは後門弟たちにおいてほぼ共通に同じ精神で受継れていくのだが、しかしわれわれはすでにみてきたようにデュルケムは彼の社会学の方法論や体系化に大きな努力を払った初期の著書や論文においてきわめて重要な部分を社会形態学に与えておきながら、その原理、方法を具体的な事例研究に対して適用することが甚少なかったように思う。確かにデュルケム自身初期の大作である『社会分業論』において、社会形態の研究に属する社会基体の研究を強調し、分業を社会の「環節的配置」の衰退によって説明しようとしていることや、さらに人口を容積と密度の事実として示している(第二編、原因と条件)とところなどに彼の『方法の規準』の具体的適用がみられるにすぎない。

社会形態学の優れた実証研究としては、「社会形態学研究」と副題をつけたモースのエスキモー社会の季節的变化に関する研究であろう(MAUSS, 1906)。この論文については上掲の小寺氏に詳しい紹介があるので、具体的内容に関してはそれに依らねたいが、夏季、冬季によって季節的变化を伴う社会的物質的基体の研究はすぐれた人文地理学だモノグラフィイといつてよいだろう。実はこれまでの主張から筆者は社会学者の主張する社会形態学は人文地理学だと主張したいわけであるが、このモースの研究をみる限り、少なくとも当時の人文地理学の研究を越えた面もっている。それは季節によって異なる社会的物質的基体—社会形態(家屋、集合形態、場所など)に対応して宗教生活、道徳、法的体系などに二系列が存在することを明らかにした点である。従って前半の物質的基体を取扱った下部構造の研究はまさに地理学的研究として適わしいものであるが、後半のその物質的基体に対応した上部構造の研究は恐らく社会学(者)ならぬものである。

デュルケム学派の中で、唯一人『社会形態学』という著書をもつアルプワックスはデュルケム、モースらの社会形態学とは異なった考えをとっている(HALBWACHS, 1938)。アルプワックスによればデュルケムやモースの社会形態学は広義のそでれあり、個別な特殊社会学の枠の中で提起れざる形態的事象や特徴であり、彼はそれを人口の事象

の中に置き換え、統合することを主張し、厳密な意味の社会形態学、いわば純粹形態学（キョヴィリエの表現）を構想している。従って彼の著書は人口現象全般についての研究である。

われわれはラッツェル地理学の基本的特徴を概略した上で、デュルケム派社会形態学の定義を読むとき、デュルケム社会形態学へのラッツェル地理学の影響の強さに驚かざるをえない⁽²⁾。そしてデュルケミアンの人文地理学批判を読むときある種の苛立ちさえ覚えるのである。確かに彼等が執拗に繰り返すようにラッツェル地理学において土地（拘束性）から問題を把握する「土地崇拜」のあることを認めざるを得ないが、それも土地の影響を直接的な社会への投影としてみていないことは、第一節でみたようにラッツェルが「位置」、「空間」概念を媒介にしていることから明白であり、この見解は明らかにデュルケムの社会形態学の中にとり入れられている。

土地あるいは地理的条件が社会の物質的基体としてデュルケム社会形態学の対象ともなる限り、人文地理学と社会形態学は衝突せざるをえなかったのである。デュルケムは社会学を樹立するに際して、その科学が成立するための条件を厳密に設定していること(DURKHEIM, 1882)からみて、類似した企てをもつラッツェルの地理学の存在を認めることは出来なかったであろう⁽³⁾。デュルケミアンは両者の対立点を土地と社会Vの間の関係をめぐる見方、因果関係に置き、ラッツェルが土地↓社会Vの仕方によっていることを一方的に批判する、そのことによって社会形態学を正当づけるかのよう⁽⁴⁾に。

土地—社会Vの関係をめぐる地理学と社会学の対立に関して、デュルケム学派はラッツェルに依りながら、地理学派の見方を狭く限定して、「土地」から出発することをもって原因をそこに求めていると即断していること、これに対してフェーブルはヴィダルの地理学をもって、デュルケム学派に反論を加えていることについてふれてきたところである。本来ならここでヴィダル地理学の諸特徴にふれるべきであるが、その余裕がない。別稿に譲りたい。ただ次章で扱う社会形態学との原理・方法の相違についてその若干は明らかにするであろう。その前に、地理学と社会学

の対立点となった土地—社会Vの関係をめぐる問題は、とにかくヴィダル派においては、デュルケム派が批判した図式が当て嵌まらない。確かにヴィダルは「土地」からみることをもって、社会学とは異なる地理学固有の立場としてゐる(VIDAL DE LA BLACHE, 1904, p. 313)。しかし土地がその関係の規定要因だとはしていない、きわめて柔軟な見方をしていることはフェーブルがくり返し強調しているところである。筆者は土地—社会V関係をめぐるヴィダルの観点は、彼の「地理学は場所の科学」という定義に凝集しているように思われる。その点だけをふれておきたい。

(3) ヴィダルの「場所の科学」

ヴィダルの「場所の科学」という言葉は、彼の晩年に近い時代に地理学の全般的諸特徴を述べたいいわゆるヴィダル地理学の精髓を披瀝した講演会での論文中に歴史学と地理学の関係を論じた個所に出てくるものである(VIDAL DE LA BLACHE, 1913, p. 299)。歴史学と地理学のそれぞれの学問の出発点、方法の相異を明らかにするために「地理学は場所の科学 la science des lieux であって、人間の科学はない」という言葉が使用されているだけで、それに対する厳密な定義らしいものはなされていない。従ってこの言葉をとり上げる人によって様々に解釈されることになる。

a フェーブル フェーブルはヴィダルに忠実である。地理学は歴史学と同じように古文書資料を援用して、人類集団の進化の歴史的分析も行なうが、それは民族や社会集団の進化そのものを問題にするためではなく、「それら諸民族や諸社会集団がいかなる作用を環境の上にもち得たか、事実もったかを決定するのに助力してもらおう」ためである(FEBVRE, 訳 一二六頁)。つまり地理学は民族や社会集団そのものが問題なのではなく、その民族、社会集団の占めている場所、環境を問題とするA場所の科学Vだというわけである。しかしその場合、環境のもつ地理的条件が民族や社会集団の上にとどのよう^に影響するかが問題^なのではなく、さらにその両項を逆転して、社会集団が地理的環境におよぼす影響がどうかということでもない。「地理学は場所の科学であるから、いっその精密さと細心な配

慮をもって、ある与えられた「景観」、直接的に観察されあるいは歴史的に復原して把握されたある地理的全体について、そのいかなる特徴が、ある特定の集団ないしはある特定の社会組織形態の、積極的にせよ消極的にせよ、持続的な作用によって説明されるか、ないしは説明されうるであろうかを追求してみる」こととされる（同、一二七頁）。フェーブルは地理学は「場所の科学」という規定を、地球上に造られた「景観」を十分に環境を考察しつつ、社会集団の作用から説明する科学としてとらえている。

b キュヴィリエ　社会学派は地理学が「土地」に視点を置き、そこから出発し、土地の社会への拘束性を求めんとしていることを批判してきた。彼等はこの観点からヴィダルの「地理学は人間の科学ではなく、場所の科学である」という規定を理解する。たとえばデュルケムの系統を引くキュヴィリエはラッツェルも最終的には「人間の事実が地表を変貌する力である」ことを認める立場に至っていること、さらにヴィダル派の地理学においては因果関係の問題にはきわめて慎重であり、『地理的決定論』からほど遠いところに来ていた」とみなしているが、先きのシミアンのようにキュヴィリエにとっては地理学において人間を地理的要因としてとらえ、人間が自然に作用する点を地理学の研究課題とする方向を「固有な地理学的説明の敗退」と考え、その証拠として、上のヴィダルの定式化を掲げるのである（CUVILLER, 1938, 訳、一五七頁）。つまりキュヴィリエは上のヴィダルの規定は地理学の環境論的見方を定式化したものとみているのであり、フェーブルとは全く反対の解釈をしているわけである。しかしヴィダルの規定をキュヴィリエのように解釈することはヴィダルが述べている彼の地理学観とは矛盾するように思われる。

c クラヴァル　つねに論義を呼んできたこのダイダルの地理学の規定について、近年クラヴァルはこのヴィダルの言葉は、「決定論の誘惑を遠ざけるためであった」と述べている（CLAVAL, 1964, 訳、八一頁）。クラヴァルによれば、ラッツェルの人類地理学はまさに人間を環境を通じて説明しようとした人間の科学であった。それに対してヴィダルは環境論から離れ、人間と環境との関係が単純なものではなく、その一方によって他を説明するのが不可能で

あることを示そうとした。そこで彼は「場所の科学」と言ったのであって、このような意図のもとに選ばれたこのことは、何ら抽象的な意味をもつものではない」と(同、八一頁)。このクラヴァルの見解はフェーブルに近いものであるが、この言葉が使われた前後の文脈からすればフェーブルの見解がもつと目的を得たものと思われる。

いずれにしてもヴィダルの「場所の科学」という定式化は、きわめて曖昧な規定である。単に歴史学と対比して、地理学をこのように規定したのは事実で、そのことよって、地理学は人間そのもの、社会、国家そのものを取扱う学問ではなく、「土地」から出発することに他の学問と異なることを示そうとしたと思われる。従って「社会」から出発する上の社会形態学と対比されるものと考えても誤りはない。その場合の説明原理はキュヴィリエのそれではなくフェーブルのそれであったことはまちがいない。いずれにしても、この規定をめぐって社会学者と地理学者で解釈が異なるのは興味深い。

注

(1) 社会学の主要部門

社会形態学

○諸国民社会の地理学的基礎を、社会機構と関連づけてとり扱う研究
○人口の研究、その大きさ、密度、およびその地上における配置の研究

社会生理学

- 宗教社会学
- 道德社会学
- 法社会学
- 経済社会学
- 言語社会学
- 芸術社会学

一般社会学

デュルケム派社会(形態)学と人文地理学(野澤)

- (2) ラッツェルとデュルケムの間は個人的関係があったかどうかはわからない。デュルケムが、ドイツのライプツィヒその他に留学をした年は一八八五年から一八八六年にかけてである。ラッツェルがリトホーフエンの後を襲ってライプツィヒに就任したのは一八八六年で、二人の出会ふ可能性はあったかも知れない。いずれにしてもデュルケムのドイツ留学以前に『人類地理学』の第一巻は著わされており、デュルケムが（いつかはわからないが）それを読んでいることは、後の第二版の書評においてその違いを記していることからまちがいない。ライプツィヒ留学中にラッツェルを読んでいたと推測するが、確証は何もない。なおデュルケムがドイツ留学中に得たドイツの学問状況を報告した論文中にはラッツェルの名はみえない。
- (3) デュルケムは一つの独立科学が成立するための条件として、(1)固有の対象をもつこと、(2)それに固有の観察と説明の方法をもつこと、をあげている。

三 デュルケム派社会形態学とヴィダル派人文地理学の原理と方法の諸問題

∧土地—社会∨をめぐってのデュルケム学派と人文地理学との対立は、ラッツェル派との間にあっては、見方と因果関係における対立を示していたが、ヴィダル派との間にあっては、対立はそこにはなく、∧土地—社会∨を研究对象とする両学問の根底にある原理と方法の対立となって現われる。最近バードレイはヴィダル地理学とデュルケム社会学の対話は彼らの基本的な認識論上の差違のため困難であったと述べている (BERDOULAY, 1978)。

(1) デュルケムとヴィダルの科学観

a 法則性について デュルケムの科学観は明快である。彼が事物として社会的事実を社会学の対象としてとりに上げるのは、社会的事実を他の自然的現象のように外部から研究することができ、そのようにみることによって、社会現象の中にも自然的秩序を構成しているという観念、さらには法則に従う社会的自然が存在するという観念を抱いていたからに外ならない。すなわち彼によれば「事実が恒常的な存在の仕方、必然的關係を産み出す本質をもつこと

が、理解されるようにならなければならないのである。換言すれば法則の概念にまで到達しなければならぬのである。法則があるという意義が科学思考の決定的要因なのである」(DURKHEIM, 1900b, 訳、一九七頁)と述べているように社会の法則が自然法則と同じように必然的に存在することを確信していたのであり、「この原理をすべての社会的事実にまで拡大しさえすれば社会学の基礎はできあがる」と「社会学開講の辞」で披瀝している (DURKHEIM, 1887, 訳、一五九頁)。これはデュルケムが一九世紀の自然科学的科學観である実証主義の強い影響下にいたことを示すものであるが、この観念は自然科学(生物学)の出身であるラッツェルと同じくするものであつたらう。因果の法則を単純に環境論の中においてのみとらえるとき、上に見てきたような批判にさらされるのであるが、法則科學としての地理學を樹立せんとしたラッツェルの科學観はデュルケムのそれに近いものであり、デュルケム自身その点でラッツェルを高く評価している (DURKHEIM, 1899b, p. 531)。

これに対してヴィダル・ド・ラ・ブラーシュの科學観はいかなるものであつたらうか。かの「地的統一」*unité terrestre* の観念、すなわち「地球が全一であり、その諸部分は秩序づけられているという観念」(VIDAL DE LA BLACHE, 1896, p. 129) はヴィダル地理學の出发点をなす根底的な原理であるが、この原理から「地理的事実」が自然的秩序を構成していることをヴィダルが承認していたことは疑いえないのであるが、ヴィダルにおいては、ラッツェルやデュルケムにみられるような法則追究に対する強い志向はみられない。このことはヴィダルが「この地的統一の観念によって地球に作用している物理的・生物学的法則が地表面の様々の部分に適用されるべき、〔それらの法則が〕どのように結合し、変形するかを探究することが地理學の特別の使命としている」と考えていること、すなわち法則の場所ごとの現われ方の違いを研究することを地理學の任務としていことから明らかである。この思想は彼の地域研究の主張となってくるのだが、しかしヴィダルの初期の論文をみると決して地域研究のみを強調していたのではない。「地理學者が研究する地球の一部分がどんなであれ、そこだけにとどまることはできないのであつて、普遍的

な要素が、すべての局地的な研究の中に入り込んでくる。その相観が郷土を規定する上で重要な遠方の影響を受けていない地方など実際に存在しない。……個々の局地的部分（地方）の近接関係を越えたところでそれぞれの地方の個性を変えずに類似した印象を刻みつけるところの一般法則が、形態あるいは気候の類似性によって現われる」（VIDAL DE LA BLACHE, 1896, p. 129）と記しているように、全く一般性を否定するものではない。しかし、それはあくまでも物理学的・生物学的法則が、個々の地表面に影響を与えるという限りにおいてである。従ってヴィダルが問題としたのは類似性によって得られる一般法則より、まず地域的差異に大きな関心が寄せられたのである。それは地表面の複雑きわまりない現象においては、ラッツェルの如き必然的な関係を認識しえないということところにある。

b 決定論および必然性と偶然性について　科学観を問題とする場合、重要な観点は決定論に対する観念である。決定論はすべての科学ないしは合理的説明にとつては不可欠のものと考えられているが、ラッツェル、デュルケムにおいては上述の科学観からして決定論の上に立っている。すなわちデュルケムにあっては社会的事実が必然的関係を生み出す本質をもつことを予想しており、偶然性を否定していることはモンテスキューの方法を検討している論文（DURKHEIM, 1893）において明らかである。ラッツェルにおいては地理的決定論はあまりにも有名になってしまつたが、彼の決定論が単純に機械論的に解釈されてはならないことはすでにふれたところである。

他方「人間に關係していることで偶然に襲われることのない現象というものは一つもありえない」（VIDAL DE LA BLACHE, 1917, p. 83）というヴィダルは彼等の対極に位置するもののように思われる。確かに彼はある歴史をもつ現象の一連の因果關係が把握されたとしても、そこから必然性をとらえることはできず、それぞれに多様な發展の道がありうるのであって、因果關係が把握された現象とても、歴史的偶然にすぎないとし、歴史的必然性をみとめていない（FEBVRE, 1922, 訳、一〇一～一〇二頁）。この立場はフェーブルによって「決定論」に對比されて「可能論」と呼ばれるに至るが、「可能論」は決して「決定論」と対立する概念ではない。フェーブルにおいては「偶然の観念」が

「可能論」として読み替えられている。この「偶然的観念」はキュヴィリエによれば、決定論と対立するものではなく、ただ「狭義の純粋な機械的決定論の概念とは対立する」(CUVILLIER, 1938, 訳, 九一頁)。ここでは偶然的観念は機械的な地理的決定論に対立するものとして評価されるにすぎないが、近年地理学への確率論的思考の導入とともに、このヴィダルの「可能論」はその性質をもつものとして評価するものもある(LUKERMAN, 1965)。しかしヴィダル自身確率論を意識していたかどうかは不明である。最近バードレイはヴィダル地理学の観点を説明し、正当化する哲学的源泉はポアンカレの約束主義 conventionalism にあつたという見解を出している(BERDOULAY, 1978, pp. 82-83)。ポアンカレは科学における大原理あるいは一般理論のコンベンショナルな性格を強調している。この約束主義とは現実に関して科学的理論の相対的随意性を示すもので、それは科学者の創造的役割を考慮するものである。あらゆる科学的一般化の仮説的性格を強調するものであり、世界の全説明に至る単一な科学の還元主義に反対するものである (Ibid., pp. 82-83)。

バードレイによればヴィダルの約束主義は、彼が現象の連がりに対して絶対的な実在を要請することを拒否することと現われており、またヴィダル地理学が根底に「地的統一」の観念を置くのも同じであるという。バートレイの見解はヴィダル地理学の観点をよく説明してくれるが、果してヴィダルが上のような認識論をもっていたかどうかはわからない。一種の解釈学にはなっている。

いずれにしてもヴィダルはデュルケムやラッツェルとは異なつて、概念や理論の相対性やコンベンショナルな性格の観念をもっていたことは事実であろう。この観点は地域研究において明白にあらわれる。

(2) デュルケムとヴィダルの説明の概念

上述したようにデュルケムは社会形態学は単なる記述、分類の段階にとどまるものではなく説明に至る科学である

ことを述べている。まず説明原理として因果関係からデュルケムの観点をみよう。デュルケムは「因果の原理が社会的現象に適合するということを持ただ承認することだけである」(DURKHEIM, 1895, 訳、一九〇頁)といっているように、自然の諸領域において検証されるこの法則は当然社会的世界において真であると考えている。

デュルケムにおいては社会的事実の決定原因は「社会」にあること、しかもそれは「個人的諸意識の諸状態のうちからでなく、先行の社会的諸事実のうちから求められなければならない」(同、一五五頁)といっているように、社会的な力である。初期のデュルケムは人間の集合表象である社会形態の二要素である社会的容積と密度を因果系列の根源においていたことはすでにふれたところである。

他方デュルケム学派の地理学派に対する批判はもっぱら複雑な因果系列の中から、自然的条件のみをとり上げ、それをもって、人類と自然、歴史と環境という大問題のすべてを説明しようとしているという点にあった。この批判がヴィダリアンにおいては少なくとも妥当しないことを、フェーブルはこの批判に対する人文地理学擁護の理由としてくり返し述べていることを上に指摘した。それではヴィダル派はどこに説明原理をもとめたのであろうか。

ヴィダルは因果関係については単純な機械論的な因果の關係ではなく、複雑な因果系列の關係を強調する。たとえば「原因や結果は明確に分離されるものではない。何故なら原因や結果の間は互に他を説明しあい、原因と結果の間には接近が起るからである」(VIDAL DE LA BLACHE, 1896, p. 1)。このようにヴィダルは因果關係についてはきわめて慎重な態度をとってきた。従って人類と環境との關係についても深い洞察によって原因を単純に自然の側のみにおくことはなく、長い歴史の中での人間の創意、工夫によることを重視し、「環境」も「それは適用と同意である」(VIDAL DE LA BLACHE, 1913, p. 297)といわれるように人間化され、人間に対立したものとしてとらえられてはいない。そして「人間の行為は先行の結びつきに依存しながら行われるとらうこと」(VIDAL DE LA BLACHE, 1911, p. 100)。このことは社会的慣性の力を重視した言葉である。「人間の社会的本性において慣習の力が大きな役割を演

じていることを想い起さなければならぬ。人間は改善を欲するという点で、本質的には進歩主義であるとしても、彼が歩む道は常にすでに引かれた線、すなわち先行する世代からの遺産によって、強固なものとなった慣習が、自らの中に形づくった特殊な技術の本質によって方向づけたものである」(VIDAL DE LA BLACHE, 1902, pp. 22-23)。この観点は社会学にも近いものであるが (DURKHEIM, 1895, 訳一五五頁; HALBWACHS, 1938, p. 168) ヴィダル地理学の保守性を示すものである。これはまた個々の地域の慣性の力を求めていく地域研究の中にあらわれる。

われわれは若干の観点についてデュルケム—ヴィダルの認識論的差異についてみてきたが、以上述べてきた諸点はいずれも、ヴィダル地理学の真髄である地域研究の上に凝集するように思われる。

(3) 地域的モノグラフィ

a ヴィダル学派の地域研究 ヴィダル地理学は「地的統一」の観念を根底としていることを述べたが、この観念はすでにふれたように本来ここから一般法則が追究され、一般地理学の樹立をめざすものであった。しかし実際に彼が弟子を唱導したのは、一般法則を追究する方向ではなかった。彼はそれをまだ時期尚早としたのである。「われわれを驚かせるのはローカルな地域を越えての類似性以上に、ローカルな地域間の差異である。地理学は一般法則の認識を追究するが、しかしその一般法則を種々な環境への適用において研究するのである。一般法則に対して、各地方が示すところの相観の差異を説明する手段を要請するのである。…これらの差異はもともと地理学的本能 *geographical instinct* を目覚めさせた好奇心そのものである。…研究の主要な努力は、地方ごとの記述的かつ推論的説明を構成する地域研究へと向けられるべきである」(VIDAL DE LA BLACHE, 1899, p. 107)。かくして地域の特徴をとらえる地域研究がヴィダル派地理学において固有の仕事となり、「地理学は本質的に記述的科學として現われる」とことになる (VIDAL DE LA BLACHE, 1913, p. 296)。もちろんヴィダルは説明を放棄しようというのではない。地的統

一の原理によって諸現象間の連がりを研究することが説明に至る道程である。従ってこのためには「地理学は他の科学以上に詳細にわたって、記述的方法を追究していかなければならない」(Ibid. p. 285)と記述的方法を重視する。

以上のような師の方法論に忠実に、門弟たちは地域モノグラフを世に問い、フランス地理学の名を高らしめたのであった。しかるにこのモノグラフィの方法は、デュルケム派社会学とは相入れぬ方法である。

b デュルケムのモノグラフィ的方法批判　すではやくから明快に自己の方法論を提示していたデュルケムは記述的、モノグラフィ的方法に対してするどい批判を行なっている。「記述は科学のもっとも低い段階にすぎない。科学は事物についての解釈によって完成される」(DURKHEIM, 1892, 訳、七頁)。

ところでデュルケムのいう社会学の固有な対象としての社会的事実は、個々別々な事実ではなく、類型として把握されるものである。彼が単純な社会である社会種から複雑な有機的に複合した社会まで社会類型を設定しているのがそれである。その場合モノグラフィ的方法是社会種を設定する手段とならない(DURKHEIM, 1895, 訳、一一七頁)。不完全なモノグラフィ研究を数多く積み重ねることで一般的なものに、類似のものに至ることはできない。この考えによって、シミアンは上掲のフランス地理学派の地域研究をとり上げた論文においてフランス学派の「地域的モノグラフィ」を批判したのであった。彼の批判の第一は、研究のために選択された枠組そのものに問題があるとする。すなわち地域研究の範囲が狭いために、偶然の一致と真の相関とを区別することを不可能にしてしまうこと、つまり多くの異なった全体との間とその地域を比較する道を閉じてしまうこと。第二は、研究対象となる地域のすべてを研究しようとすることに對する批判である。これは複雑な全体としての個体において個を説明しようというもとも困難なことから始めようとしていること、の二点である(SIMIAN, 1908, p. 731)。

むろんヴィダルとても地理学が一個の個別的な地域特殊研究で終わってしまうのではなく、より上位の全体との関係において明らかにされるものであることは、次のことから明白である。ローカルな研究対象である「部分はそれ自身

では明らかにしえず、それを明らかにするには全体に照らすことが必要である。地域あるいは世界の諸部分による部分的集團は、それらの意味と存在理由をもっているが、それは上位の統一体を不完全にしか反映していない。……従ってローカルな研究はこの上位の一般性の原理から着想をうるとき、多くの特種な事例を越えた意味と範圍を獲得する」(VIDAL DE LA BLACHE, 1896, p. 141)といわれ、部分と全体との關係において問題とされているのであるが、部分である地域研究を全体(一般地理学)から分離し、結局は地域に埋没してしまったことは事実であり、社会学派からの批判は今日からみても的を射ていると思われる。

ヴィダル自身、「普遍化を目的とせず、法則の発見を独自の役割とすることもなく、各時代各民族(ヴィダルの場合各地域)特有の個性と独自の特徴を明らかにする」というデュルケムが理解していた歴史学の立場に近いものであった(DURKHEIM, 1898, 訳、一九一頁)。ヴィダルは結局歴史学者としての方法を脱することができなかったわけであり、歴史学者フェーブルの支持を得たのもその辺に理由がありそうである。

なおこの社会学派のモノグラフィ的方法の批判は六〇年代の地理学革命においてなされたイデオグラフィックとノモセティック論争に通じるものがある。ただヴィダル派地理学がラツツェル的な性急なドグマティックな理論化に対するアンチテーゼとしての意義は消極的ながら認めねばならぬであらう。

結 論

われわれはこれまであまり紹介されることの少なかった前世紀末から今世紀始めにかけてみられたデュルケム社会学派と人文地理学派の間の対立について検討してきた。この論争・対立そのものは社会学からの一方的批判であって、いわゆる論争のかたちをとっていないため、議論としては生産的なものではなかったが、歴史家のフェーブルが人文地理学を擁護するに至って、始めて論争の様相を呈したといえる。しかしフェーブルが批判の書を著わした頃は

すでに論争そのものが下火になっており、彼の著書はこの論争の「決算報告」の役割を果たすことになった（飯塚、一九四二）。従つてフェーブルの見解がその論争に対する評価として、地理学界では長く暗黙のうちに承認されるかたちとなった。今日ではこのフェーブルの擁護が、地理学者たちを社会学者から遠ざける結果になったとしてマイナスの評価をするものもあり（CLAVAL, 1964, 訳、一九四頁）、新しい観点から検討し直してみると、フェーブルの見解に必ずしも与しえないところがある。

(1) デュルケムのラツツェル地理学批判に始まるこの論争ではあるが、デュルケム自身社会形態学の構想においてラツツェルから多くのものを得ていることはまちがいない。デュルケムが社会学成立に対してもった厳しい条件は人類地理学の存在を認めることができなかつた。デュルケム派が必要以上に地理学の観点、因果関係を非常に狭く解釈し框にはめることで徹底的批判を試み、彼らの考える人文地理学の分野を社会学体系の一部として包括せしめてしまふことを主張した背後には、ラツツェル—デュルケムの深い関係によるものと考えられる。

(2) \wedge 土地—社会 \vee をめぐるデュルケム派社会学とヴィダル派地理学との対立は、デュルケム派のラツツェル批判を越えたところにある。こゝにはヴィダルとデュルケムの認識論上の対立がある。その対立点はヴィダル地理学の真髓である「地域研究」に凝集する。このヴィダル派地理学の方法に対するフェーブルの擁護は、その後の地理学の発展を阻害したとされるところのものであった。

(3) デュルケム派によれば人文地理学は社会形態学として社会学体系の一部内として位置づけられるのであるが、社会学からの成果は上述のように決して多くはない。今日では社会形態学は人文地理学および人口統計学をさすといわれている（DUVERGER, 1964, 訳、四二頁）。

- (1) 本稿は今年三月めでたく停年御退官を迎えられる社会学の内藤莞爾先生に、日頃の御指導に感謝して執筆を始めたのであったが、全く意に満たないものになってしまった。お許しいただきたい。
- (2) 本稿の主題につき実際のこの論争の体験をお持ちの小寺廉吉先生には有益な御教示をえた。記して感謝致します。
- (3) 本稿引用文につき邦訳のあるものは文中に引かれたものであっても、その多くを利用していただいた、いちいち注記しなかつたが、感謝する次第である。
- (4) 本稿印刷中、中久郎氏の大作『デュルケームの社会学論』（創文社）が著わされた。この中で社会形態学の性格について、要領を得た紹介がなされている（八二―九〇頁）が、ラッツェルやこの論争については全く言及されていない。

参考文献

- 赤袖良議（一九四八）環境社会学 竹井出版
- BERDOULAY, V. (1978) The Vidal-Durkheim Debate, in "Humanistic Geography: Prospect and Problems", ed. by D. Ley and M. Samuels, pp. 77-90.
- BUTTIMER, A. (1971) Society and Milieu in the French Geographic Tradition, A. A. G.
- BUTTIMER, A. (1978) Charism and Contact: The Challenge of La Géographie Humaine, in "Humanistic Geography: Prospect and Problems", ed. by D. Ley and M. Samuels, pp. 58-76.
- CLAVAL, P. (1964, 1975) Essai sur l'évolution de la géographie humaine, Les Belles Lettres. 竹内啓一訳『現代地理学の論理』大明堂
- CLAVAL, P. (1973) Principes de géographie sociale. Editions M. TH. Genin.
- CUYILLER, A. (1936) Introduction à la sociologie. 清水義弘訳『社会学入門』岩波書店
- DURKHEIM, E. (1888) Cours de science sociale, Leon d'ouverture, Revue internationale de l'enseignement, XV, pp. 23-48. 小関藤一郎・川喜多喬訳『社会学講義―開講の辞』、小関藤一郎・川喜多喬訳『モンテスキューとルソー』法政大学出版、所収
- DURKHEIM, E. (1892) Contribution de Montesquieu à la constitution de la science sociale. 小関藤一郎・川喜多喬訳『モンテスキューの社会科学成立に対する貢献』、同訳『モンテスキューとルソー』所収

- DURKHEIM, E. (1893) De la division du travail social : Etude sur l'organisation des sociétés supérieures. 田原謙邦訳 『社会分業論』青木書店
- DURKHEIM, E. (1895) Les règles de la méthode sociologique. 田原謙邦訳 『社会科学的方法の規程』有隣堂
- DURKHEIM, E. (1898) RAZTEL, F. ; Der Staat und Sein Boden geographisch beobachtet (Leipzig, 1896), L'Année Sociologique **1**, pp. 533-539.
- DURKHEIM, E. (1899a) Morphologie sociale, L'Année Sociologique **2**, pp. 520-521.
- DURKHEIM, E. (1899b) RAZTEL, F. ; Politische Geographie (Munich et Leipzig, 1897), L'Année Sociologique **2**, pp. 522-532.
- DURKHEIM, E. (1899c) RAZTEL, F. ; Der Ursprung und das Wander der Voelker... (Leipzig, 1898), L'Année Sociologique **2**, pp. 550-551.
- DURKHEIM, E. (1900a) RAZTEL, F. ; Anthropogeographie, Erster Theil : Grundzüge der Anwendung der Erdkunde auf die Geschichte, 2^e éd., Stuttgart, L'Année Sociologique **3**, pp. 550-558.
- DURKHEIM, E. (1900b) La sociologie en France au XIX^e siècle, Revue bleue 4^e série, T. XIII, pp. 609-613, et 21, pp. 647-652. 小関藤一郎・川喜多喬訳 「十九世紀のフランスの社会学」 同訳 『パンネキー・デュナン』所収
- DURKHEIM, E. (1900c) La sociologie et son domaine scientifique. 小関藤一郎・川喜多喬訳 「社会学の学問的領域」 同訳 『パンネキー・デュナン』所収
- DURKHEIM, E. (1901) RAZTEL, F. ; Das Meer als Quelle der Voelkergrosse (Leipzig et Munich, 1900), L'Année Sociologique **4**, pp. 565-567.
- DURKHEIM, E. (1909) Sociologie et sciences sociales, in "De la méthode dans les sciences", pp. 259-285. 小関藤一郎・川喜多喬訳 「社会学と社会諸科学」 同訳 『パンネキー・デュナン』所収
- DURKHEIM, E. (1913) BRUNHES, J. ; La géographie humaine (Paris, 1912), L'Année Sociologique **12**, pp. 818-821.
- DUYERGER, M. (1964) Méthodes des sciences sociales, PUF. 深瀬均一・樋口豊一訳 『社会科学の諸方法』勁草書房
- FEBVRE, L. (1922) La Terre et l'évolution humaine : Introduction géographique à l'histoire. 飯塚朝一・田辺裕訳

『大地と人類の進化』岩波文庫

小寺麻吉(一九六九) 社会学と地理学との境界領域における若干の問題 桃山学院大学社会学論集 二一一—二五頁

HARVEY, D. (1972) Social Justice and the City, E. Arnold.

HALBWACHS, M. (1908) RATZEL, F. ; Raum und Zeit in Geographie und Geologie. Naturphilosophische Betrachtungen, VIII-177, L'Année Sociologique **11**, pp. 720-723.

HALBWACHS, M. (1938) Morphologie Sociale.

飯塚浩一(一九四一) 'ノホーブン『大地と人類の進化』解題 岩波文庫

LUKERMANN, F. (1966) The "Calcul des Probabilités" and the "Ecole Française de Géographie" Canadian Geographer, **9**, pp. 128-137.

MAUSS, M. (1906) Essai sur les variations saisonnières des sociétés Eskimos : Etude de Morphologie sociale, L'Année Sociologique **9**, pp. 39-132

斎藤三雄(一九四四) 「中心と周辺」—Ratzelとその空間文化の研究と其の発展 地理雑誌 八四 七一—八二頁

RATZEL, F. (1899) Le sol, la société et l'état, L'Année Sociologique **2**, pp. 1-14.

RAVENEAU, L. (1892) L'élément humain dans la géographie de M. Ratzel, Annales de Géographie **1**, pp. 331-347.

SIMIAN, F. (1908) Demangeon, A. ; La Picardie et les régions voisines, Artois, Cambresis, Beauvais. ; Blanchard, R. ; La Flandre, Etude géographique de la plaine flamande en France, Belgique et Hollande.

; Vallaux, C. ; La Basse-Bretagne. Etude de géographie humaine. ; Vacher, A. ; Le Berry. Contribution à l'étude géographique d'une région française. ; Siou, J. ; Les paysans de la Normandie orientale. Pays de Caux, Bray, Vexin normand, Vallées de la Seine. L'Année Sociologique **11**, pp. 723-732.

SORRE, M. (1957) Rencontres de la géographie et de la sociologie. 松田信訳『地理学と社会学の接点』大明堂

水津一朗(一九六四) 『社会地理学の基本問題』大明堂

水津一朗(一九七四) フリーマン・ラッシュェル『近代地理学の開拓者たち』地人書房所収

竹内啓一(一九七九)主観の地理学からの逆照射—社会地理学の位置— 一橋論叢 八一 六五—六六七頁

VIDAL DE LA BLACHE, P. (1896) Le principe de la géographie générale, *Annales de Géographie* **5**, pp. 129-142.

VIDAL DE LA BLACHE, P. (1898) La géographie politique à propos des écrits de M. Frédéric Ratzel, *Annales de Géographie* **7**, pp. 97-111.

VIDAL DE LA BLACHE, P. (1899) Leçon d'ouverture du cours de Géographie, *Annales de Géographie* **8**, pp. 97-109.

VIDAL DE LA BLACHE, P. (1902) Les conditions géographiques des faits sociaux, *Annales de Géographie* **11**, pp. 13-23.

VIDAL DE LA BLACHE, P. (1903) La géographie humaine, les rapports de la géographie humaine avec la géographie de la vie, *Revue de Synthèse historique* 飯塚浩二譯「人文地理学—それと生物地理学との関係」『人文地理学原理』岩波文庫 所収

VIDAL DE LA BLACHE, P. (1904) Rapports de la sociologie avec la géographie, *Revue internationale de Sociologie* **12**, pp. 309-313.

VIDAL DE LA BLACHE, P. (1911) Les genres de vie dans la géographie, *Annales de Géographie* **20**, pp. 193-212 et 289-304.

VIDAL DE LA BLACHE, P. (1913) Des caractères distinctifs de la géographie, *Annales de Géographie* **22**, pp. 289-299.

VIDAL DE LA BLACHE, P. (1917) La répartition des hommes sur le globe, *Annales de Géographie* **26**, pp. 81-93 et 241-254.

山野正彦(一九七二)F. Ratzelの再評価に関する一つの試み—「位置」及び「空間」概念を中心に—, *人文地理* 二四—二七頁
 山野正彦(一九七九)空間構造の人文主義的解説法—今日の人文地理学の視角— *人文地理* 三一—四六—六八頁